

Assembly East 2017

乙 13 テーブル総評

Judge

浦川（上智 4） 星野（東大 4）

Table member

今井（立教 3） 弟子丸（青学 2） 西村（青学 2） 市川（成蹊 3） 田沼（フェリス 2） 山上（東洋 2） 石井（明治 2）

構成

1. 議論の流れ
2. 順位と選定理由
3. コメント

1. 議論の流れ 文責：星野（東大 4）

ジャッジしていた側の解釈の上、議論の流れを書かせていただきます。テーブルメンバーとの理解のずれもあると思いますがその点をご容赦ください。（本テーブルでは主にコンパリで議論がなされたため、そこを中心に書かせていただきます。）

Narrowing ~ ASQ

西村、市川、今井の 3 人がオピメとして立候補した。いずれも臓器移植をトピックとしたオピニオンシートであり、投票の末に今井がオピメとして選ばれた。

ASQ では市川、弟子丸、西村を中心に基本的な Q によりオピメの定義、考えが引き出された。Cause において田沼により”Level System”を考慮するのかという Q がなされたが、今井の Mandate で話そうという発言により後で話されることとなった。

SOH, NFC において反論は出ず、PLAN へ移行した。

PLAN

Mandate において田沼により再度”Level System”の説明がなされた。内容は「人工臓器を移植された患者は、臓器移植を受ける（生体の臓器を貰う）ための待ち時間が長くなり、そのために臓器移植を受けることが出来ない。従ってこれらの患者についても考慮して Mandate の対象にするべきである」という主張であった。今井、西村、弟子丸の Q により田沼の意図は AD が減るのを防ぐことで考慮しない場合は Solution に反論したいというこ

とだと分かり、考慮することになった。

Solution において反論は出ず、**AD** が立論された。

DA

田沼、西村、弟子丸、山上が立候補した。**TG** として田沼は **B/D**、西村と弟子丸は **B/D/E**、山上は **Doctor** を定めた。投票の末に西村と弟子丸のアイデアが同票を得て残ったが、弟子丸の西村のアイデアとコンバインしたいという発言により両者のアイデアをコンバインしたものが **DA** として選ばれた。

Comparison

今井の **AD>DA (QL)** のアイデアが展開された。内容は以下の通りである。

Data) **AD** は自身の死 **DA** は他者の死 (**s/m** が引き起こされる原因について)

Warrant) **AD** は **DA** より数 (**number**) の観点において多くのプラスを失う。

(プラスという単語についての明確な定義は明らかにならなかったが、ここでいうプラスとは趣味や家族、友達などのその人に何かしらのプラスの影響をもたらすもの、という意味だったと理解している。)

西村のカンファメにより **Data** は直ぐに立証され **Warrant** に移行した。**Warrant** において弟子丸から数 (**number**) の観点だけでなく程度 (**degree**) の観点も考慮すべきという主張がなされた。今井及び弟子丸自身の発言に基づき、①数 (**number**) の観点において検証、②程度 (**degree**) の観点において検証、③数 (**number**) と程度 (**degree**) の観点の比較、の順番で検証を行うというプロシが提示されるも一旦今井のロジックに戻る事となる。

再度今井によりロジックの **Warrant** について説明がなされる。彼女の主張は「**AD** は自身が死ぬために何もプラスが残らない一方で、**DA** は自身が死ぬわけではないため少なくとも一つはプラスが残る。そのために数の観点では **AD** は **DA** より多くのプラスを失うために深刻である」というものだった。この説明の後、弟子丸の **Q** によりオピメは **AD** が失うもの (趣味など) と **DA** が失うもの (家族など) が異なる (イコールではない) と考えていることが分かった。これを受けて弟子丸がダウトを提示する。内容は「数の観点のみで比べて程度の観点を考慮しないならば、**AD** が失うものと **DA** が失うものは同じ (イコールである) はずである。もしオピメにとって趣味と家族がイコールでないならばオピメは程度の観点も考慮すべきである」というものだった。今井や西村により情報が引き出され、最終的に前述のプロシ (①数の観点において検証、②程度の観点において検証、③数と程度の観点の比較) に基づいて議論を行えばよいということになり、プロシの①のステップである今井のロジックに再度戻る事になった。

田沼、弟子丸の **Q** により今井のロジックはプラスを失う (**lose plus**) という観点のみに

注目し、マイナスが消える (vanish minus) という観点は考慮していないことが分かった。これを受けて西村がダウトを提示する。その内容は「プラスを失うという観点ではオピメの言う通り AD の方が DA より多くのプラスを失うために深刻であるが、マイナスが消えるという観点では DA の方が AD よりマイナスが消えない (DA は死なないから) ために深刻である」というものであった。このダウトに対し今井の「今回の Mandate により引き起こされるものは AD と DA のプラスを失うこと及び AD のマイナスが消えることであり、DA のマイナスが消えるということは引き起こされない (関連がない) ために考慮すべきでない」という発言により、西村のダウトは収束した。

続いて弟子丸が再度ダウトを提示する。彼の主張は「AD は自身のプラス (自身の趣味や友達等) を失うのに対し DA も家族である B/D のプラス (B/D の趣味や友達等) を失うことになるので、数の観点においても AD=DA である」という主張であった。彼が強調していたのは DA にとって家族である B/D のプラスも直接かかわる身近な人のプラスのために十分考慮するに値するということだった。このダウトに対し今井が「もし弟子丸の主張が成り立つなら AD についても家族のことを考慮できることになる。この時 AD 側 (もし T/P しなかった時) は AD の家族及び AD 自身がプラスを失い、DA 側 (もし T/P した時) は DA 自身及び DA の家族である B/D がプラスを失うため、両者の構図は同じになる。従ってコンパソンとして AD と DA 自身が失うプラスのみに注目して比べるべきでありそこに反論してほしい」という主張を行い、弟子丸のダウトは収束した。

再度今井のロジックの Warrant に戻る。弟子丸の Q により今井は失うプラスの数は AD より DA の方が 100%多いと証明したいことが引き出された。これを受けて今井が、①例外 (exception) を集める、②例外を検証する (もし全ての例外が立たなければ 100%だと証明できる) というプロシを提示した。弟子丸により受け付ける例外に制限を設けるべきだという主張がなされたが、今井の例外が多く出てきたら考えようという発言によりこのプロシに乗って検証することになった。

このプロシの下で田沼が例外を提示する。彼女の主張は「AD にとってのプラスが一つしかなかった場合があり、この時 AD、DA とともに失うプラスの数は一つである。そのため数の観点において $AD > DA$ かどうかは不明確 (unclear) である」というものだった。弟子丸により田沼の意図が引き出され、最終的には今井が 100%でなく多くの場合 (majority) で AD より DA の方が失うプラスの数が多いことを証明したいとスタンスを変更した。その結果により田沼の例外の話は収束して、数の観点においては多くの場合 (majority) で $AD > DA$ であることが証明された。

続いて弟子丸の DA>AD というロジックが展開された。その内容は「AD は(病気による)死が原因、DA は日本政府による死が原因でプラスを失うために、程度 (degree) の観点では多くの場合 (majority) で DA>AD である」というものであった。今井の Q により情報が引き出されたところで議論が終了した。

2. 順位と選定理由 文責：浦川(上智4)

- 1位 今井 (立教3)
- 2位 弟子丸 (青学2)
- 3位 西村 (青学2)
- 4位 市川 (成蹊3)
- 5位 田沼 (フェリス2)
- 6位 山上 (東洋2)
- 7位 石井 (明治2)

1位 今井 (立教3)

オピニオンプレゼンターとして議論の土台をつくり AD>DA を提示したことを評価しこの順位とした。常に落ち着いて相手の意見を聞いたうえでのトリートをしていたこと、議論が滞ったとき C や S によりテーブルを動かしていたことを主に評価した。一方でコンパリでは弟子丸のダウトに少々振り回されている節があり、他者の発言の構造をよりマクロに捉えた上で進める力が必要に感じた。とはいえ、彼女が優秀なディスカッサントであることには違いない。特に彼女の優しく丁寧なオプレの形からディス界が学べることは多いであろう。エデュケーターとしての彼女の今後に期待したい。

2位 弟子丸 (青学2)

議論に出てきたいくつかの論点をより深めるためのコンスタントな介入、そしてコンパリでの絶え間ないダウトの提示を評価しこの順位とした。この乙テーブルにおいて一番議論を議論たらしめる役割を担ったのが彼であろう。着眼点が鋭く、自身のアイデアを質問を通し無理なく提示していく様は好印象であった。しかし、そのアイデアの多くはあまりテーブルに浸透することなく終わってしまい、その点が1位との差となった。今後、自身のアイデアを中心としたテーブルをつくる技術を磨いてもらいたい。

3位 西村 (青学2)

弟子丸とともに DA に選ばれたこと、コンパリでダウトを提示したことを評価しこの順位

とした。今井、弟子丸の介入では不十分であった細かなところを明らかにしていく良い介入が比較的多かった。しかし、その介入から次につなげることができていなかったため 2 位とは大きな差が開いてしまったと考える。今回のディスでは中立的な立場からの介入があまりなく、それを西村が担える状況だっただけに惜しいと感じてしまう。考えは鋭いと思うので、来年の成長に期待したい。

4位 市川 (成蹊 3)

いくつかの Q を評価しこの順位とした。質問自体はどれも広げれば論点となりうるものであったと思う。オプレとして選ばれなかった場合どの様に議論を展開できるのか、引退した今もう一度考えてみるのも良いのではないだろうか。そして、今まで学んできたことをエデュケーターとして後輩に伝えていってもらいたい。自分が思っている以上に多くのことを伝えられるのではないかと思う。

5位 田沼 (フェリス 2)

ASQ/PLAN でのアイデアの提示、コンパリでのダウトの提示があったためこの順位とした。Level System という新しいアイデアを提示するまではよかったが、テーブルにおいてそのアイデアがもたらした影響が不明確であったためそれを評価するまでに至らなかった。とはいえ、春セミのころから常にアイデアを持ち続けている点は個人的に評価したい。今後、議論に必要なアイデアとは何だろうか意識しながらアイデアを練ってみたい。

6位 山上 (東洋 2)

介入が限定的であったためこの順位とした。

7位 石井 (明治 2)

介入がなかったためこの順位とした。

3. コメント

アッセンお疲れ様でした。生意気に改善点の指摘とかしましたが、春セミ・アッセン通して見ていて一番楽しいディスでした。議論の質が高かったかといわれると微妙ですが、1つのアイデアに対してここまで時間を割いて議論するディスはあまり見られないため、今回のテーブルにいれたことは皆さんにとって貴重な経験になったのではないかと思います。

とはいえ、3年にとってこのアッセンは後悔の残る結果だったかもしれません。ですが、この後1年どう過ごすかでこのアッセンがそれだけで終わるのかどうなのか、意味が変わってきます。ということで、エデュケぜひぜひ頑張ってみてください！

2年はまだまだこれから！自分だけができるディスを見つけるため頑張ってください。応援しています。 浦川(上智4)

改めてアッセンお疲れ様です。最後に面白い議論が展開されているテーブルをジャッジ出来て素直に嬉しく感じました。みんなの鋭い介入と真摯な姿勢のおかげで議論が面白いものになったのだと思います。もちろん改善できる点はまだまだあったと思いますが、是非自信を持ってください。

3年生はプレーヤー引退おめでとう。満足のいくディスをどれほど出来たか分からないけど、少しでもその努力とか経験を後輩に還元してあげてください。2年生はまだまだこれから大きく成長できるよ。来年の活躍にとっても期待しています。 星野(東大4)